

アボジワ オモニ

そん ほん やん
宣 憲 洋

妻は「アボジワ オモニ」ということばを聞くと思わず、「ちがう、ちがう」と言いたくなってしまおうである。

アボジとは、韓国語で父のことであり、オモニは、母のことである。ワは日本語の「と」に相当する助詞である。

だから、「アボジワ オモニ」とは、韓国語で父と母と言う意味である。

しかし、助詞「ワ」が、日本語の助詞「は」に聞こえてしまい、まるで「父は母」と言っているように聞こえる時があると言うのだ。

もう 20 年程前の話だが、韓国語を学習している社会人受講者数人と一緒に韓国旅行をしたことがある。その当時韓国で一番高い 63 階建ての「63 (ユックサム) ビル」に行った時のこと、そのビルの飲食店街でとてもスマートで美人の受講者が、「先生、ヘンポコってなんですか？」と僕に尋ねた。

「そんなものは知りませんね。どこにありましたか？」と聞くと、「あれを見てください。あそこに書いてあるでしょう？」と通路沿いにぶら下げてあるメニュー板を指差す。それを見ると、「ヘンポゴ」と書いてある。ハンバーガーのことですよと答えた。

なぜ、こんなことが起こったかと言うと、韓国語では k、t、p、c の 4 子音は有声音間もしくは流音・有声音間で有声化することを当時まだ初学者だった彼女は知らなかったのだから、そのまま無声音で読んだのである。

ハングルの子音字は発音器官を象形化して作られているが、1942 年に『訓民正音』(ハングルの本来の名称であるとともにその公布文書名) 原本が発見されるまでは、この事実が知られていなかった。そのため、古篆模倣説、梵字模倣説、パスパ文字模倣説、チベット文字起源説、甚だしくは韓国の障子の棧の形から作られたとか、鶏の足跡からであるとか、珍説奇説が行われたこともあった。

韓国語と日本語では、表現の仕方がひどく異なることがある。

例えば日本語では「申し上げます」、「いたします」と表現するところを韓国語では日本語に直訳すると「言って上げます (お言葉をあげます)」、「してあげます (やってあげます)」と表現する。

このため、一世の在日韓国人が日本語で話すと、ひどく押し付けがましく聞こえることがある。

また、小樽駅前前のバスターミナルで札幌行きのバスを待って並んでいる人に「このバス札幌へ行きますか」と聞くと、おそらく聞かれた人が日本語話者で日本語で答える場合、「行くと思ひますよ」と答える人が多いに違いない。

正確にそのバスが札幌に行くかどうか知らないから「行くと思う」と答えるのではなく、断定を避けた表現がより丁寧だと感じているからに過ぎない。

あるいは「行くことは行くが、これは北大経由だから大通りに行くのなら、円山経由に乗った

ほうが良いのだが」などの複雑な思いがあって、語尾を濁したのかもしれない。

これを尋ねたのが韓国人ならば、「行くと思う」という表現に不安を感じて、きっと別の人もう一度同じ質問をして確認するに違いない。

韓国語で「どうなさいましたか」とか「どのようなご用件でこちらにいらっしゃいましたか」と尋ねるのは、日本語に逐語訳するなら「どのようにいらっしゃいましたか」と表現する。だから本だけで韓国語を勉強した人や、韓国語の初学者が、韓国でこの質問をされると、「地下鉄駅から歩いて来ました」などと答えて、受付の人を微笑ませたり困惑させたりすることになる。

韓国語授業の作文の課題で、「疲れました」という文を出題すると、学生は、ほぼ全員が「ピゴンヘッスムニダ」と過去形で回答する。

実際に韓国人に向かって「ピゴンヘッスムニダ」と言ったら、誰も今現在の話とは理解せず、何時の話かと聞くに違いない。

「あ、バスが来た」も同じだ。韓国語では現在形を使い「あ、バスがくる」という。

話は変わるが、妻は悩みが多い。夫の収入が少ないために生計を維持するのが並の苦労ではない。おまけに最近痴呆症気味の母の介護で、心が休まる暇がない。仕事も、勤務先の医院が業務規模を縮小していて、こちらの方でもストレスを受けるらしい。

勢い娘に愚痴ることになる。娘の方はストレスがたまる一方である。

何度か娘に愚痴るのは止めろと言いかけたが、妻としてもせめて愚痴る相手でもいなければ、それこそ胃に穴が開いてしまうかも知れず、とても、そうは言えない。

それで、「オモニは、重荷」という娘の台詞が出てくる結果になってしまうのである。

確かに娘にとって母は重い存在かもしれない。何とかして娘の荷を軽くしてやらなくては、とは思っただが…

胃の話が出たついでに、昔から重宝されている健胃剤に「センブリ（千振）がある。カッコ内の漢字表記を見ても分るように、この薬草の語源は『広辞苑第2版補訂版』によると、「千度振り出してもなお苦いとの意」とされている。類似の造語に「ナナカマド」などもあることから、あるいはそうかもしれないとも思えるが、私は韓国語の「sseunbul」スンプリ（苦い草）が語源に違いないと思っている。

草は現代語では phul と言うが、「P」が有気音化し出したのは 15・16 世紀のことだからそれ以前にこのことばが韓国語から入ったとしたら「sseunbul」語源説は十分成り立ちうる。韓国語の音節末の子音 [l] は口蓋化していて「リ」に聞こえる。

日本語であれ韓国語であれ外来語（主として英語）の氾濫は、大きな問題となっているが、外来語の取り入れ方は韓国語の方が、比較的保守的と言えよう。

たとえば、ボランテア、ブランド、ガソリンスタンド、スコップ、ガラス、リュックサックなどの語は韓国では使わない。

タバコは、日本語にはポルトガル語から入ったが、韓国語にはフランス語から入ったので韓国語ではタンベと言う。

風車やチューリップで有名な国を日本語ではオランダというが、韓国語ではネーダーランドウと言う。

韓国語の音素は母音 10、半母音 2、子音 19 で、日本語は母音 5、半母音 2、子音 15 である。音節の構造は、韓国語は V、VC、CV、CVC で、日本語は V、CV、(VN、CVN) となっていて、そのせいで英語などの発音は韓国語の方がしやすい。もっとも英語の発音が韓国語の方がし易い

からと言って別に自慢にはならないが…

いずれにしても韓国語の音の仕組みの中での英語と日本語の音の仕組みの中での英語は、大幅に語音が違うので、日本人と韓国人が会話する時、外来語の使用には注意が必要である。